

第一章

「や、やばい…。もうお金なくなっちゃう…！」

何気なくスマホで口座の残高を確認した私は、思っていた以上に減っているその数字に思わず驚きの声を上げてしまった。大学生になって服やコスメ、ネイル、友達との遊び…。新しい生活に浮かれ実家からの仕送りをほとんど使ってしまった。いた。

「はぁ…。そろそろバイト始めないとかなあ。なんかいいバイトないかなあ。」
時給のいいバイトを探すため、求人サイトを開き画面をスクロールしていくと、ある求人が目に留まった。

「えっ！ これめっちゃ時給いいじゃん！ …でもメイド喫茶か…。あたしにできるかなあ。」

メイド喫茶の仕事をイメージしてみる。メイド服を着て接客をするんだよね…。想像すると何だか恥ずかしくなってくるけれど、羞恥よりもお金の方が大事だ。

「…まあ、無理だったらやめればいいか。」

そう楽観的に考え、私は募集内容をよく見ず応募ボタンを押した。

＊

「こんにちは…。」

後日、指定された日時にメイド喫茶の面接にやってきた。店の裏口の扉を開け声を掛けると、中から男性が顔を出した。

「あゝ！　もしかして有紗ちゃん？　このメイド喫茶の店長です。上がって上がって！」

年齢は三〇代くらいだろうか。すらっとした体型に清潔感のある見た目、ハキハキとした態度。メイド喫茶の店長ってもっとおじさんなのかと思ってたけど、この人なら何とかやっていけるかも。店長に促されて店の中へと入ると、休憩室へと案内され椅子に座るよう言われた。

「いやゝ有紗ちゃん可愛いねゝ！　これならお客さんにもすぐ気に入られると思

うよ！」

「ほんとですか？　ありがとうございます…。」

面と向かって褒められると照れるが、悪い気はしない。店長は軽く会話をしながら面接で使うであろう資料を机に出していった。

「もう採用って言いたいところなんだけど、いくつか聞いておかないといけないことがあるから答えてくれる？」

「は、はい！」

「まず初めに、有紗ちゃんは処女？」

「…えっ!?　しょ、処女かどうかですか…？」

私は想像していた問いと全く違う問いに驚いた。働く上で必要な情報ではないのではないか、というか絶対メイドになるのに処女かどうかなんて関係ないよね？　本当は男の人に、しかも初対面の人にこんなこと言いたくないんだけど…。言い淀んでいると店長に早く答えるよう急かされ、私は仕方がなく小さな声で答えた。

「あっ…え、っと、処女、です…。」

「処女かー！　じゃあ、男の人に触られたこともないよね？」

「は、はい…。」

店長は私が答えたことを用意していた紙にすらすらと書き写していった。友達にも処女だって打ち明けたことないのに…。そんな私の落胆を気にも留めず、店長は次々と質問してきた。

「じゃあ、普段オナニーするときはどこ触るの？　乳首？　それともクリ？　処女だったら中は触ったことないかな？」

「オ、オナニー、ですか？　いや…そんなのしたことない、です…。」

私は恥ずかしさから咄嗟に嘘をついた。本当はクリトリス責めが大好きで、夜な夜な自分の指や玩具でクリトリスをいじめているのに。

「そっかー。じゃあ、初めてはあのお客様がいいかなあ…。まあ、とりあえずいいか！　次は有紗ちゃんの体直接見ていくね。服脱いで？」

「えっ、服ですか！？　い、いや…。」

あのお客様、という気になる言葉が出てきたが、そんなことも頭からすっ飛んでいくような要求をされて思わず大きな声を出してしまった。初対面の男性に下

着姿を見せるのはさすがに恥ずかしい、と拒否の意を込めて首を横に振った。

「別に意地悪で言ってるんじゃないよ？　うちは露出メイド喫茶だから、性感帯の見た目や感度もお客様を満足させるためにはすごく重要なんだよ！」

店長の言葉に目を丸くする。露出…？　性感帯…？　え、こっつてもしかしてエッチなお店？　私の心の声を察したのか店長が大きなため息をついた。

「もしかして有紗ちゃん、募集要項ちゃんと見てなかった？　時給だけ見て応募してくる子結構多いんだよ。うちはお客様に性的なご奉仕をするメイド喫茶なんだよ。…どうする？　知らなかったみたいだし、今回はなかったことにしてもいいけど…」

正直、性的なサービスをするなんてハードルが高いし、うまくできる自信もない。だけど、お金に困っているのは事実だ。求人サイトで他のバイトも見たけれど、ここ以上に時給のいいバイトはなかった。

お金のためと思って割り切れば、経験がなくても大丈夫なはず…！

「だ、大丈夫です！　私できます…！」

「有紗ちゃんができるって言うならいいけど…。じゃあ服脱いで、体見せてくれ

る？」

意を決して椅子から立ち上がり、一つ一つ服を脱いでいった。下着だけになった恥ずかしさから反射的に腕で体を隠しそうになるが、ぐっとこらえて真つすぐ店長の前に立った。店長に体をじっと見られ、顔に熱が集中していくのを感じる。「有紗ちゃん、服着てる時と思ってたけどおっぱい大きいね。これは指名たくさん入るかもね。」

店長は私の体を値踏みするようにじっとりと視線を這わせた。

「じゃあ、ちょっと下着の中も見せてね。」

心の準備をする間もなく、店長にブラジャーを捲り上げられ、胸があらわになる。

「あっ…ちょ、店長!？」

咄嗟に腕で胸を隠したが、すぐに店長にはらわれてしまった。

「お客様を満足させるためには、大きさもだけど感度も大事だからね。感度の確認もさせてね？」

「おっ♡」

店長は私の乳首を指先でつんつんと触り始めた。突然の刺激に思わずびくっと体が跳ねる。指先で両方の乳首をちょんちょんと触られ、快感が胸に溜まってく。

「勃起具合もいいね。」

ぷくりと勃起上がった乳首を指先でゆっくりと扱かれる。陰茎を扱くように上下され、次第にお腹の中が熱くなってくる。乳首の先を触っていた店長の指がだんだんと乳首の根元を引っ掻く動きへと変わっていった。

「あっ♡て、てんちょ…♡かりかりするの…♡だめです♡んっ♡」

「うん、感度もなかなか良さそうだね」

乳首を弄っていた店長の右手がするりとパンツの中に潜り込み、秘部の入り口をぬるりと撫でた。

「んっ!? ♡あっおっ…♡て、店長、そこも、見るんですか…? ♡」

「もちろん。乳首触られただけでこれだけ濡らせるのは才能だね。ちょっと見づらいからパンツ脱がせるね。」

店長はパンツから右手を抜き私の前にしゃがむと、パンツを足首までおろした。

あらわになったクリトリスをじっと見つめたかと思うと、指先でぐりっと押しつぶし始めた。

「んおっ!? ♡♡」

ぐりぐりぐりぐり♡

遠慮なく押しつぶされたクリトリスがむくむくと起き上がってくるのを感じる。店長の二本指でクリトリスのてっぺんをすりすりと擦られ、腰が自然と前へ突き出る。

「クリもよく勃起できてるね。」

「おっ♡おお〜♡クリだめっ♡♡つよすぎる♡」

ぐりぐりと潰されたかと思うと、ぬちぬちと陰茎を抜くように指先で抜かれ訳が分からなくなる。強すぎる快感でだんだんとガニ股になり、腰もへこへこ動き始めた。

「感度もいいね〜。これなら早速お客様の前に出せそうだよ。」

「んあ♡おっ♡おお♡♡」

ぎゅっぎゅっぎゅ♡

最終確認をするかのように根元からぎゅっと潰され、びくんっ♡びくんっ♡と腰が跳ねる。快感を求めて更に腰がへこへこと浮き上がった時、ぱっと店長の指がクリトリスから離れていった。

「うん、有紗ちゃん合格！早速メイド服に着替えちゃおうか！」

「んっお…♡ありがとう、ごさいましゅ…♡」

気持ちよさの余韻を感じつつ、店長から衣装を受け取り更衣室へと向かった

＊

「えっ!? な、なにこれ…!」

店長から手渡されたのは一見普通のメイド服だったが、広げてみると胸と秘部に穴が開いた普通では考えられないメイド服だった。スカートもとても短く、もはやスカートとしての役割を果たしていない。

「そっか…露出メイド喫茶なんでもんね…よし!」

お金のためと心の中で自分自身に言い聞かせ、メイド服に袖を通した。

＊

「て、店長、着れました…。」

「おー！ 有紗ちゃんすっごく似合ってるよ！ じゃあ早速お客様の所へ行こうか！」

「え、も、もうですか!？」

もっと接客の練習みたいなものがあるのかと思っていた。性的な知識は人並みにはあると思っているが、男性経験はない。ご奉仕、と言われるとこちらから積極的に働きかけるイメージがあるし、自分にうまくできるのだろうか。

「有紗ちゃん、そんな不安な顔しなくても大丈夫！ 有紗ちゃんの初めてのお客様はうちの常連さんで、すっごく優しい人だから！」

「ほ、ほんとですか…?」

「ほんとほんと！ それに、有紗ちゃんが初めてな事はちゃんと伝えておくから！」

「わ、分かりました……！」

店長に大丈夫、と背中を押され、お客様の待つ個室へと向かった。

第二章

「ふう——よし！」

個室前で大きく深呼吸をし、気持ちを落ち着かせてから扉を軽くノックする。

コンコン

「どうぞ。入っていいよ。」

「し、失礼いたします…！」

がちやっとドアを開けると、室内のベッドに腰掛ける男性が見えた。性的なお店に来る客は年がかなり上かと思っていたが、想像よりも若い人が目の前に現れ驚いた。二〇代くらいだろうか…若いが少ないとも自分よりは年上そうだ。しかも顔がかっこいい。イメージと違いすぎて、ドキドキと胸が鳴り始める。

「ほ、本日担当させていただきます…！ メイドの有紗です…！」

勢いよく挨拶するとお客様はにこにこ笑って、手招きをした。

「聞ってるよ。新人さんなんでしょ？ 緊張してるよね。ここ、おいで？」

ベッドをぼんぼんと叩き、隣に座るよう促された。高鳴る胸をなんとか抑え、

お客様の隣へゆっくりと座る。

「あ、あの、私、初めてで…いまいち何をしていいのか分かってなくて…」

せっかくお金を払っているだろうに申し訳ない。正直に打ち明けると、お客様はにこっと笑いかけてきた。

「大丈夫だよ。有紗ちゃん緊張してるみたいだし、ちょっとお話ししようよ。」

「えっ…？ 分かりました…。」

想像の中で準備していた流れとは大幅に異なり困惑する。てっきりすぐにそういう雰囲気になるのかと思っていた。優しい口調と声色に安心していると、お客様は肩と肩が触れ合うほど近くに寄って座ってきた。

「あ、あの…近いです…！」

肩どころか頬まで触れ合いそうな程の距離に、恥ずかしさから少し体がのけぞる。だが、ぐっと体を抱き寄せられたまた距離が近くなった。

「少しずつ慣らせないと。これからもっとエッチなことするんだよ？ ♡」

もっとエッチなこと…頭の中で想像して恥ずかしくなり、顔に熱が集まる。でも、これも仕事だ。メイドとしてしっかりご奉仕しなければ。私は恥ずかしさを

振り払い、覚悟を決めてお客様の目をじっと見つめた。

「だ、大丈夫です！ 私はご主人様のメイドなので…！ ちゃんとご奉仕できます！」

お客様は少し驚き目を丸くしたかと思うと、くすつと笑った。

「有紗ちゃん面白いね♡俺、有紗ちゃんのこと気に入っちゃった♡俺の名前は樹（いつき）。ご主人様じゃなくて樹さんって呼んでくれる？」

「樹さん…？」

「そうそう。やっぱ名前呼ばれる方がいいねえ♡ほら、有紗ちゃん、ここ乗って？♡」

樹さんは自身の太ももをぽんぽんと叩き、上に乗るよう指示してきた。樹さんと顔を合わせるように足の上に乗ると、秘部にぎりっ♡と固い物が当たる感覚がした。経験のない私でもそれが何かはすぐに分かった。

「あ、あの樹さん…当たって…♡」

「有紗ちゃんが可愛くて俺のおっきくなっちゃった♡でも安心して？ 有紗ちゃん初めてだし、ゆっくりしてあげる♡」

すり♡すり♡すり♡

樹さんが人差し指の腹で乳首の先端を優しく撫でる。樹さんの低い声で耳元に囁かれ、もうすでにエッチな気分になっていた私にとっては、そんな些細な刺激でも十分快感だった。

「んっ♡樹さん♡乳首すりすり…♡だめ…♡」

「メイドがご主人様にだめとか言わないの♡乳首触ってくれてありがとうって言わないでしょ？」♡

「んん♡あっ…♡乳首♡すりすり、してくださって…♡ありがと…♡ございます…♡あっ♡あぁ…♡」

乳首の先端だけをさする樹さんの指にもどかしさがどんどん溜まっていく。気持ちいいけど、絶頂できるほどの刺激でもない。無意識に胸をゆさゆさと揺らし、もっと触ってほしいと樹さんにアピールしてしまっていた。

「こゝら♡メイドが勝手に気持ちよくなるうとするな♡」
ぐりぐりぐりぐり♡

優しく触っていた指の動きから、突然乳首を人差し指と親指で挟みぐりっつつ

ねられその刺激にびくんっ♡と体が跳ねる。

「んおっっ!? ♡ごめんなしゃ…♡そんなぐりぐりしたら…♡おお♡乳首、とれちゃう…♡おお…♡おっ♡おっ♡」

「ごめんごめん♡有紗ちゃん乳首びんびんに勃起してるからつねりやすすぎて、つい強くしちゃった♡よしよし痛かったね…♡」

手のひらで乳首の先端をぐるぐるとゆっくり転がされる。焦らすようなその動きにどんどん気持ちよさが胸の先端へ溜まっていく。

「おお♡おお♡よしよし♡きもち♡あっああ♡」

「有紗ちゃんってもしかしてマゾ? ♡何しても気持ちよくなれるんじゃない♡じゃあこっちはどうかなく?」

「ああ♡あ…♡しよれだめえ♡んお♡お…♡」

かりかりかり♡

乳首の根元から爪先でかりかりと引っ搔かれる。さっきまでゆっくりと責められていたのに急に指を高速で動かされ、その緩急に腰がびくびくと跳ねる。

「まただめって言った♡ご主人様の言うことはちゃんと聞かないと♡悪い子には

お仕置きだよ？」

ぐにぐにと両方の乳首を指先でつままれ上へと引っ張られる。引っ張った乳首を右へ左へゆらゆらと揺らされ、胸もたゆたゆと一緒に揺れる。

「あっ♡あぁ♡♡♡樹しゃ♡♡♡ごめんしゃ♡♡♡んあ♡♡♡おっ♡だめだめちくび、舐けてくdashai♡♡♡んお♡♡♡」

「：ほんとド変態マゾなんだね♡いいよ、俺そういう子だし♡いすき♡雑魚乳首がつよつよ乳首になれるように、俺が舐けしてあげる♡」

かりかり♡ぎゅっぎゅ♡かりかり♡ぎゅっぎゅ♡

ぎゅっつとつねられると痛いはずなのに、どんどん気持ちよさが溜まっていく。じわじわと乳首の先端に熱が集まる。

「んん♡♡♡あっ♡♡♡イク♡♡♡イク♡♡♡雑魚乳首、イキましゅ♡♡♡イクイクイツく…!!♡」

びくびく♡♡

達すると同時にびくんと上半身が跳ねる。こてんと樹さんの肩に頭を預け、はあはあと肩で息をしているとよしよしと優しく頭を撫でられた。

「有紗ちゃんすごいすごい♡乳首でイクイクってできたねえ♡」

そう耳元で囁くと、大きな手のひらが私の腰からお尻をゆっくり撫で上げた。そのままズボン越しに大きくなったものを秘部に押し付けられる。

「でもまだまだご奉仕してもらうよ？ 見て、俺のズボン♡乳首いじめられて気持ちよくなった有紗ちゃんのまん汁でべっとべと♡」

樹さんにそう言われ下半身の方へ視線を向けると、樹さんのズボンに大きなシミをつくってしまっていた。お客様の洋服を汚してしまった。焦ってすぐに樹さんに謝罪を告げた。

「あっ…！ 樹さんごめんなさい…！ 私全然気が付かなくて…これ、クリーニングとか、弁償とか…！」

わたわたと慌てていると、樹さんが優しく頭を撫でた。

「有紗ちゃん大丈夫だよ♡むしろ気持ちよくなってくれて嬉しい♡腰突き出して、ぐちょぐちょのまんこ直接見せて？」

樹さんに指示され、秘部が樹さんに見えるようにぐっと腰を突き出す。じっと見られ、更に愛液がとぷとぷ♡と溢れてきているのを感じる。

「べちよべちよじゃん♡俺にいじめられて嬉ションしちゃった？」

「んんっ♡」

樹さんが指先で秘部の入り口からクリトリスまでを撫で上げる。クリトリスにぴとっと当たった指が止まったかと思うと、ぴんっと弾かれる。

「おお♡それきもち…♡」

「有紗ちゃんのクリ勃起しすぎてちんぽみたいになってるよ♡もうクリちんぽだね♡」

樹さんは勃起したクリトリスを指先でつまもうとするが、愛液で濡れていることもあり、にゅるんと逃げていく。それすらも刺激となり、腰がびくびくと跳ね始めた。

「もう有紗ちゃんお漏らししすぎ♡勃起クリつねってあげようと思ったのに。あ、でもしこしこはしやすそうだなあ…♡」

「んおおっ♡や…♡ほんとに、おちんちんに♡なっちゃうう…♡」

クリトリスをつまむことを諦めた樹さんは陰茎をしごくようにクリトリスを人差し指と親指で上下し始めた。男性にするような責め方をされ、恥ずかしさから

樹さんの手を止めようとするがあっけなくはられてしまった。

「有紗ちゃんこのままクリちんぽ射精できるんじゃない？ ほら、お射精頑張れ

♡ちゅこちゅ♡」

樹さんに射精を促され、出るはずもない精子を出そうと無意識にへこへこと腰が動く。腰の動きに合わせるようにしこしこ♡と指を動かされ快感がクリトリスへ溜まっていく。

「あっ♡樹さん、イっちゃう…♡もうイク…！ ♡」

「どこがイクのか言わないと分かんないよ♡雑魚クリちんぽイキますってちゃんと宣言して？」

「あっ♡雑魚クリちんぽ、♡んあ♡イキ、ます♡あゝ♡イクいくいく♡っっ！
」♡

ふしゃあっ♡

樹さんはびくん♡びくん♡と絶頂の余韻を感じながら潮を吹く秘部のでっぺんでまだびくびくと震えているクリトリスを手のひらでぐちゅぐちゅと撫でまわした。いったばかりのクリトリスはあっという間に熱を帯びていく。